The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	困難を表す接尾辞「-にくい」「-づらい」の用法 : ウェブコーパスに基づく考察
Author(s)	王, 淦
Citation	現代日本語研究. 2018, 10, p. 53-65
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/70104
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

困難を表す接尾辞「-にくい」「-づらい」の用法

―ウェブコーパスに基づく考察―

The Use of the Suffixes *-nikui* and *-zurai* Denoting Difficulty:
A Study Based on a Web Corpus

王 淦
WANG Gan

キーワード：「-にくい」，「-づらい」，意志性，感情主体，ウェブコーパス

要　旨

行為や状態の実現の困難を表す接尾辞「-にくい」と「-づらい」を比較すると，「-にくい」は意志動詞にも無意志動詞にも付くのに対して，「-づらい」は意志的な行為を表す動詞に付きやすく，行為の遂行に苦痛が伴うためにその遂行が困難であることを表すと一般に言われる。本稿では，「-づらい」の上接動詞をウェブコーパスによって調査し，無意志動詞と組み合わせられる場合，しばしば表現の背後に実現の困難を感じる主体の存在が想定されることを述べる。

１．はじめに

形容詞型接尾辞「-にくい」と「-づらい」は，ともに動詞の連用形に接続し，行為や状態の実現が困難であることを表す。しかし，両接尾辞は意味・用法が微妙に異なり，上接動詞にも違いが見られる。すなわち，「-にくい」は生産性が高く，意志動詞にも無意志動詞にも接続し，話し言葉としても書き言葉としても広く用いられる。それに対して「-づらい」は本来意志動詞にしか接続せず，話し言葉の性質が強い。そして，近年，日常の話し言葉や雑誌・新聞などにおいて，「-づらい」の使用が拡大しつつあり，本来「-にくい」が期待されるところにも「-づらい」が用いられるようになっていることが山田(1999)，高島(2007)，国広 (2010) などによって指摘されている。本稿では，「-にくい」と「-づらい」の用法の差，特に，「-づらい」が無意志動詞と組み合わせられる用例をウェブ

コーパスの観察に基づいて考察する。

２．先行研究とその問題点

２．１．先行研究

森田（1977）は「-にくい」は意志動詞・無意志動詞・自然現象の動詞に接続し，客観的な困難を表し，対象側に困難を生み出す原因・理由がある場合に多く用いられ,それに対して「-づらい」は自然現象や無意志性の動詞には続かず,肉体的理由に原因することが多く，精神的理由にも用いられると述べている。

徐（1983）は「-にくい」が客観的なむずかしさを表し,「-づらい」には客観的なむずかしさや物事がうまくいかないことによって感情を悪くさせられるという動作主の精神的要素が同時に入るとしている。

飛田・浅田（1991）は両接尾辞とも「物理的にむずかしい場合」と「心理的にむずかしい場合」があり,「ややマイナスよりのイメージの語」であるとしている。両者の違いについて,「-づらい」は「困難の程度はそれほど大きくなく,かなり客観的な表現になっている」「困難を感じている主体の存在を暗示する」のに対し,「-にくい」は「やや客観的な困難さを暗示し，困難の原因は主体でなく対象にあることが多い」としている。

近藤（2004,2005,2016）は現代語「-づらい」との対照から，古典語「-にくし」の歴史変化を考察している。その中で，近藤（2005）は困難をもたらす要因に基づいて「-づらい」の用法を 4 つに分類し，形容詞「つらい」が表す精神的・肉体的苦痛との関わりが稀薄になっていくほど，またマイナス評価から中立的になっていくほど,「-づらい」の許容度は下がるとしている。近藤による「-づらい」の用法の分類は次の通りである。

①心理的・精神的抵抗による困難

②肉体的苦痛・五感への負担による困難

③道具・器具の使い勝手の悪さ，物の取り扱いの不便さによる困難

④能力，外的条件による困難

三木（2004）は「-づらい」と非対格自動詞との共起について考察し,「-づらい」は経験者自身のことが原因で引き起こされる能動的苦痛･困難を表すため,文の中に経験者を求め，経験者が存在しない場合は内在的コントロールのある

主語名詞句を要求するとする。それに対して「-にくい」は経験者以外のことが原因で引き起こされる受動的苦痛・困難を表すから，経験者があるか否かは問わないとしている。

神作（2006）はスポーツ紙のウェブサイトから用例を収集して両接尾辞の使い分けを考察し,「-にくい」は「言い切り」「丁寧さ」の性質が強く,「-づらい」には「話し言葉」「バリエーションの多さ」の性質があるとしている。

金城（2011）は「Yahoo!知恵袋」掲載のベストアンサーのコーパスに基づいて調査し，主体に原因を帰することができない「-づらい」の用法，無意志動詞と共起している「-づらい」の用法を確認した。

進藤（2014）は西日本新聞オンライン記事データを利用して通時的な観点からの考察を行い,「-にくい」の件数が「-づらい」を大きく上回っていることや，近年「-づらい」の使用が増加していることを確認した。ただし，無意志動詞については,「-づらい」の用例が少ないために,「分かりづらい」「見えづらい」に有意の増加が認められることを指摘するにとどまった。

２．２．問題点

三木（2004）は無意志動詞と共起する「-づらい」の用例をサーチエンジンGoogleで収集して考察を行ったが,「-にくい」との頻度差を考察していない点に不満が残る。神作（2006），金城（2011），進藤（2014）はコーパスの内容や規模の制限により，無意志動詞と「-づらい」の組合せの用例が多く得られていないために，その問題について詳細な分析は行われていない。

本稿では，ウェブコーパスから得られる多数の用例を用いて両接尾辞の使用状況を調査し，それぞれの接尾辞がどのような動詞とよく組み合わせて用いられているのか，無意志動詞と共起している「-づらい」の用法がどのような様相を呈しているのかを考察する。

３．両接尾辞の基本的な意味

考察に入る前にまず，先行研究において両接尾辞の基本的な意味とされてきたところを確認すれば次の通りである。

「-にくい」の基本的な意味：

行為の遂行，状態の実現が困難である。

「-づらい」の基本的な意味：

行為の遂行に動作主の心理的・肉体的苦痛が伴い，その結果として行為の遂行が困難である。

そして，「-づらい」は感情形容詞「つらい」の苦痛の意味を引き継ぎ，常にマイナス評価の表現になる。「-にくい」には評価上の制約はない。

４．ウェブコーパスに基づく考察

４．１．両接尾辞の上接動詞

４．１．１．調査方法

ここでは，『国語研日本語ウェブコーパス』――以後，その英語名の略称である「NWJC」[1)]によって言及する――の品詞列検索機能を用いて両接尾辞の上接動詞を中心とした調査を行う。NWJC には 2014 年 10 月から 12 月までに収集されたウェブ上の日本語テキストが格納されており，データの延べ語数は 3,885,889,575 である。

NWJC では検索結果のダウンロードが最大 10 万件までに限定されている。本調査で扱う「-にくい」「-づらい」の件数はいずれも 10 万件を超えており，一つの表現におけるすべての用例を収集することは不可能であるため，「-にくい」「-づらい」の中で出現頻度が比較的に高い上接動詞だけを調査対象とする。

また，ウェブコーパスには形態素解析の誤りなどの問題も大きい。そこで，検索結果に不必要なものが大量に混じってしまうことをできる限り避けるために，ここではデータの量より質を重視し，原則として検索条件の指定には形態素解析の結果である「形態素」ではなく「表層形」――コーパスのテキストにおける実際の出現形――を用いる。「-にくく」「-にくさ」などの形も調査対象とせず，両接尾辞の終止・連体形だけを調査対象とする。

調査の具体的な手順を「-にくい」について述べれば次の通りである。「-づらい」についても同様である。

（ｉ）調査対象となる上接動詞を選定する

「品詞＝動詞＋表層形＝にくい」という検索条件を指定して検索し，ヒットした結果の中の 10 万件をダウンロードして，両接尾辞の使用

頻度の高い上接動詞を抽出する。ただし,「避ける（さける，よける)」「止める（とめる，やめる)」のようにコーパスの形態素解析で誤りの起きやすい動詞は調査対象から除外する。「入る（いる)」「止まる（やまる)」などの動詞は用例が少ないと考え,「入る（はいる)」「止まる（とまる)」などは調査対象とする。

（ⅱ）動詞ごとの両接尾辞の用例数を調査する

「表層形＝聞き＋表層形＝にくい」のような条件で検索し，具体的な用例数を調べる。「聞く」「聴く」のように一つの動詞に複数の表記がある場合は，それぞれの表記を検索し，用例数を合算する。

（ⅲ）複合的な表現の用例を除外する

たとえば「表層形＝組み＋表層形＝にくい」の条件で検索した場合,「取り組みにくい」などの複合動詞の用例が検索結果に含まれる。そのような用例の件数を除外するために,「品詞＝動詞＋表層形＝組み＋表層形＝にくい」という条件でも検索し，得られた複合動詞の件数を先の結果から除く。「生きて行きにくい」などの補助動詞の用例も同じ方法で「行きにくい」の結果から除く。

（ⅳ）複合サ変動詞の場合

上接動詞が複合サ変動詞[2)]の場合，NWJC では「名詞＋し＋にくい」の形式で形態素解析を行っているため，ほかの動詞の場合に準じて，まず「品詞＝名詞＋表層形＝し＋表層形＝にくい」で検索して調査対象となるサ変動詞を選定し，そして「表層形＝理解＋表層形＝し＋表層形＝にくい」のような条件で検索して，それぞれの動詞の件数を調べる。

４．１．２．調査結果と分析

NWJC における両接尾辞の総出現数は,「-にくい」が 1,473,541 件,「-づらい」が 411,865 件である。そのうち本研究の調査対象となるのは「-にくい」が 1,240,128 件,「-づらい」が 365,391 件である。

同じ上接動詞に付く「-にくい」「-づらい」の頻度差を示すために，サ変動詞以外の動詞の場合は,両接尾辞の用例数の合計が 500 件以上の動詞(計 219 語)

を，「-づらい」が合計に占める割合の降順で，上位 50 位を表 1 に，下位 50 位を表 2 に示す。サ変動詞の場合は，合計が 300 件以上の動詞（計 97 語）を，「-づらい」が占める割合の降順で，上位 30 位を表 3 に，下位 30 位を表 4 に示す。

表 1：両接尾辞の上接動詞（「-づらい」の割合の降順で上位 50 位）

	にくい	づらい	%
いる	85	1798	95.5
聞く	4346	4395	50.3
帰る	508	507	50.0
見る	42795	37664	46.8
絡む	1507	1323	46.7
話し掛ける	981	845	46.3
話す	2261	1710	43.1
生きる	3452	2546	42.4
頼む	1026	675	39.7
掛ける	367	237	39.2
買う	4093	2624	39.1
行く	9842	6232	38.8
使う	48429	28853	37.3
休む	719	410	36.3
食う	556	313	36.0
誘う	590	331	35.9
釣る	1178	640	35.2
付き合う	575	311	35.1
合わせる	1615	846	34.4
着る	592	304	33.9
断る	1527	773	33.6
読む	33419	16129	32.6
動く	6459	3083	32.3
書く	9423	4441	32.0
来る	851	398	31.9
狙う	1299	607	31.8
遊ぶ	678	308	31.2
扱う	9223	4183	31.2
取る	12404	5421	30.4
決める	760	329	30.2
押す	3140	1337	29.9
勧める	418	175	29.5
投げる	481	201	29.5
当てる	1346	555	29.2
動かす	1598	658	29.2
歌う	1804	741	29.1
戦う	1125	461	29.1
打つ	5974	2358	28.3
絞る	538	212	28.3
出す	9297	3661	28.3
立てる	1163	450	27.9
言う	24194	9140	27.4
測る	495	187	27.4
付ける	1442	543	27.4
寝る	1628	613	27.4
掴む	5756	2167	27.4
喋る	913	340	27.1
回す	487	181	27.1
聞き取る	7769	2876	27.0
履く	555	205	27.0

表２：両接尾辞の上接動詞（「−づらい」の割合の降順で下位 50 位）

	にくい	づらい	%
飽きる	736	33	4.3
起こる	4947	218	4.2
引っ掛かる	1000	43	4.1
繋がる	9316	357	3.7
消える	932	35	3.6
固まる	618	23	3.6
出来る	11335	384	3.3
痩せる	4773	161	3.3
生える	735	24	3.2
申し上げる	1571	51	3.1
忘れる	1018	32	3.0
流れる	894	28	3.0
腐る	1538	48	3.0
育つ	1778	55	3.0
燃える	1868	53	2.8
現れる	889	24	2.6
取れる	3469	91	2.6
溶ける	3809	97	2.5
滑る	10310	261	2.5
太る	8420	204	2.4
落ちる	11489	274	2.3
剥がれる	773	17	2.2
漏れる	808	17	2.1
得られる	1494	30	2.0
切れる	1311	23	1.7
錆びる	2123	36	1.7
冷える	597	10	1.6
飛び散る	503	8	1.6
傷む	972	15	1.5
冷める	2665	40	1.5
外れる	1531	22	1.4
目立つ	5064	69	1.3
倒れる	1102	15	1.3
くっ付く	903	12	1.3
透ける	1445	18	1.2
濡れる	645	8	1.2
脱げる	977	11	1.1
生ずる	1866	20	1.1
折れる	1636	17	1.0
蒸れる	1483	15	1.0
零れる	991	10	1.0
響く	1321	13	1.0
壊れる	5188	48	0.9
疲れる	12652	102	0.8
汚れる	3775	29	0.8
傷付く	1324	8	0.6
傷付ける	991	5	0.5
破れる	1576	5	0.3
ずれる	1818	3	0.2
崩れる	3059	5	0.2

表３：サ変動詞に付く用例数（「-づらい」の割合の降順で上位 30 位）

	にくい	づらい	%
コメントする	1287	2184	62.9
確認する	883	858	49.3
評価する	663	562	45.9
紹介する	296	248	45.6
入力する	351	264	42.9
予想する	641	455	41.5
更新する	284	197	41.0
プレーする	303	210	40.9
把握する	1267	864	40.5
アクセスする	650	438	40.3
操作する	1524	987	39.3
作業する	450	288	39.0
購入する	232	147	38.8
利用する	1395	882	38.7
運転する	855	540	38.7
接続する	272	169	38.3
認識する	461	283	38.0
質問する	370	226	37.9
参加する	978	576	37.1
説明する	5421	3178	37.0
生活する	396	231	36.8
回答する	522	292	35.9
使用する	286	154	35.0
勉強する	202	107	34.6
共感する	369	194	34.5
納得する	386	202	34.4
判断する	2755	1436	34.3
検索する	300	150	33.3
集中する	397	195	32.9
対処する	254	123	32.6

表４：サ変動詞に付く用例数（「-づらい」の割合の降順で下位 30 位）

	にくい	づらい	%
安定する	367	69	15.8
妊娠する	1452	257	15.0
自覚する	314	55	14.9
消化する	685	113	14.2
摂取する	469	77	14.1
掃除する	837	136	14.0
分解する	374	41	9.9
繁殖する	554	46	7.7
浸透する	895	72	7.4
色落ちする	389	28	6.7
侵入する	284	20	6.6
失敗する	648	43	6.2
変化する	394	24	5.7
吸収する	803	48	5.6
故障する	481	28	5.5
腐食する	326	17	5.0
発生する	2815	145	4.9
乾燥する	823	39	4.5
感染する	495	21	4.1
伝線する	474	20	4.0
リバウンドする	991	40	3.9
劣化する	910	34	3.6
変色する	567	20	3.4
変形する	548	18	3.2
付着する	862	24	2.7
酸化する	1322	36	2.7
煮崩れする	1396	38	2.6
型崩れする	442	12	2.6
破損する	373	6	1.6
湯冷めする	583	5	0.9

統計全体から，「-づらい」と比べて，「-にくい」の用例数が圧倒的に多く，頻繁に共起する上接動詞も多いことが分かる。表 1 と表 3 に見る通り，「-づらい」の使用率が 90%を超えるような上接動詞は「いる」（95.5%）だけである[3)]。それに対して，表 2 と表 4 に見る通り，「-にくい」の使用率が 90%を超える動詞は非常に多い。

上接動詞から見れば，「-にくい」は意志動詞・無意志動詞ともに頻繁に共起しているのに対し，「-づらい」は意志的な動作を表す動詞と共起しやすいことが確かめられる。

表 1 に見る通り，「-づらい」の使用率が高い上接動詞はほとんど意志動詞である。一部の動詞は無意志動詞としても使えるが，実際に用例を見るとほとんど意志的な動作を表す用例である[4)]。「絡みづらい」の場合も“人に近づきにくい，話しかけづらい”という意味の意志動詞の用例が圧倒的に多い[5)]。

表 2 にあげた動詞のうち，「申し上げる」「忘れる」「滑る」「傷付ける」以外はすべて無意志動詞である。「申し上げる」はほとんど「申し上げにくいのですが」との慣用表現として使われている用例であるため，「-づらい」の用例が少ない。「傷付ける」の場合，わざと何かを傷付ける欲求は通常少ないため，意志性が低いと考えられる。無意志動詞や意志性が低い動詞の場合，「-づらい」の使用率が低い。サ変動詞の場合も同じ傾向が見られる。

上の表にはすべてを示していないが，「-づらい」の使用率が 15%以上の和語の動詞(計 103 語)の中に，明らかに無意志動詞であるものは「分かる」(26.7%)，「聞こえる」（22.6%），「見える」（15.3%），「合う」（15.2%）[6)] だけである。「-づらい」の使用率が 15%以下の和語の動詞（計 116 語）のうち，明らかに無意志動詞であるものは 72 語である[7)]。そのほか，「覚える」(14.7%)，「思う」（12.2%），「考える」(9.2%)，「受ける」(7.2%)，「感ずる」(6.1%)，「死ぬ」（5.5%），「得る」(5.4%)，「気付く」(4.6%)，「忘れる」(3.0%)，「傷付ける」（0.5%）など，思考・知覚・生理現象などに関わる意志性が低いと考えられる動詞は 10 語である。

４．２．無意志動詞と「-づらい」の組合せ

三木(2004)は，無意志動詞の主語名詞句が内在的コントロールを持つ場合，

「-づらい」と共起できるとしている。内在的コントロールとは，動作主が存在せず，主語名詞句が自発的に作用・活動することができる性質を言う。

しかし，調査結果を見ると，明らかに内在的コントロールの性質があると考えられる無意志動詞の場合，「-づらい」の使用は非常に少ない。表 2 と表 4 にあげた動詞の多くは，自発的に作用する事象を表し，たとえば「腐る」(3.0%)，「錆びる」(1.7%)，「傷む」(1.5%)，「壊れる」(0.9%)，「破れる」(0.3%) など，サ変動詞の場合は「色落ちする」(6.7%)，「劣化する」(3.6%)，「変形する」(3.2%)，「酸化する」(2.7%) など，いずれも「-にくい」のほうが圧倒的に多く用いられている。

「-づらい」の使用率が比較的高い無意志動詞として従来指摘されているのは「分かる」「見える」である。それらは無意志動詞ではあるが，表現の背後に，分かろう（見よう）としてその実現に困難を感じる主体の存在が想定される。

調査によって得られた，「-づらい」と共起しやすい無意志動詞には，「分かる」「見える」（および「見える」に近い「聞こえる」）以外にも，「合う」(15.2%)，「伝わる」(14.4%)，「決まる」(12.8%)，「当たる」(11.5%) などがある。以下では従来指摘されていないそれらの無意志動詞の用例を見ていく。

「合いづらい」の 232 例の例文のうち，「目のピント/焦点が合いづらい」の用例は 35 例，「カメラのピント/フォーカスが合いづらい」の用例は 108 例である。次はその例である。

(1) 仕事で細かい字の書類とかに目を通すことが結構あるのですが，目が疲れてくるとピントが合いづらい。

(2) 撮影の時に，デジタルカメラで被写体を撮ると，被写体が小さすぎて，ピントが合いづらい，という事はありませんか?

ピントは自ら合うものではなく，目のピントの場合，焦点を合わせようとする主体が存在する。カメラの場合も，ピントを被写体に合わせようとする撮影者の存在が想定される。

「決まりづらい」の 76 例の例文では，前の名詞句の多くは「戦術」「計略」「日程」「内定」「後任」「入居」「賃貸」などである。「戦術」「計略」「日程」なども自ら決まるものではなく，決定しようとする主体が存在する。

(3) 自分がどんな予算でどんな家を建てたいかをはっきりとしておかない

と依頼する会社もなかなか決まりづらいと思います。

(4)負けている状況で守りに入った相手に無血開城を決めなければいけないわけです。つまり，計略を使いたい場面は計略が決まりづらい場面ということになります。

「当たりづらい」の 292 例の例文のうち,「攻撃が敵に当たりづらい」のような用例は 122 例である。この場合，攻撃の主体が存在する。

(5) 武装の特性から，戦闘の基本である旋回攻撃が当たりづらいため，戦い方をかなり考える必要が出てくるわけで。

「伝わりづらい」の場合，無作為に抽出した 100 例の例文で確かめると，主語名詞句はほとんど「雰囲気」「感情」「気持ち」などで，物理的作用を表す用例は「冷たさ」と「振動」の 2 例のみである。

(6) メールだと軽く見られてしまうなど，伝え方によって真剣な気持ちが伝わりづらいこともあるでしょう。

(7) 断熱性能が高いので，寒いときは地面の冷たさが伝わりづらい。

物理的作用は自ら別の場所に届くが,「感情」「気持ち」などの場合はそれを伝えたいと思う主体の存在を想定することができる。

以上のように考えてくると,内在的コントロールを持つ無意志動詞と比べて,むしろ内在的コントロールの性質がないほうが「-づらい」を許容しやすいと言える。すなわち，人間の意志とかかわりなく自ら作用・活動する事象は,「-づらい」に含まれる感情形容詞「つらい」の意味にそぐわない。むしろ，内在的コントロールがなく,背後に困難を感じる主体の存在が想定できる場合にこそ,「-づらい」の許容度が高くなると言うことができる。

５．まとめ

以上,「-にくい」「-づらい」の使用状況をその上接動詞に着目して考察した。その結果を簡単にまとめると，以下のようになる。

- 用例数から見ると，ごく一部の動詞の場合を除き,「-にくい」は「-づらい」より多用されている。
- 「-にくい」は意志動詞にも無意志動詞にも広く用いられるのに対し,「-づらい」は意志性の強い動作を表す動詞と組み合わせられやすい。

無意志動詞以外において，人間の思考・知覚・生理現象などに関わる意志性が低い動詞も「-づらい」と共起しにくい。

・ 無意志動詞でも，行為や状態の実現に困難を感じる主体の存在が想定される場合には，「-づらい」の使用率が比較的高い。

注

1）NWJCはNINJAL Web Japanese Corpusの略である。英語表現として不自然であるが，そのように命名されている。

2）「愛する」「信じる」のような1字漢語複合サ変動詞はここに含まれていない。

3）「視聴しづらい」の用例384例の中に，ある音楽に関するブログからの用例が366例を占めている。実際に用例を確かめると似た表現の重複出現であるために「視聴する」を考察対象から除外した。

4）無作為に抽出した100例の「-づらい」の例文の中に無意志動詞の用例数が比較的に多いのは「動きづらい」（12 例），「来づらい」（9 例）のみである。

5）無作為に抽出した100例の「絡みづらい」の用例において無意志動詞の用例は8例である。

6）「合いづらい」の用例365例の中に，あるゴルフに関するブログからの用例が133例を占めており，同ブログからの「合いにくい」の例文は一例もなく，統計の大きな偏りを避けるためこのブログからの用例を除外した。

7）「上がる」「回る」「通る」「起きる」のような意志動詞と無意志動詞両方の用例がある動詞は含めていない。

参考文献

神作晋一（2006）「形容詞型接尾語『～にくい』『～づらい』の動向――スポーツ紙のウェブサイトから――」『国語研究』第69号：18－35.

金城克哉（2011）「コーパス分析に基づく『～にくい』・『～づらい』表現の研究」『留学生教育　琉球大学留学生センター紀要』第8号：19－35.

国広哲弥（2010）「『しにくい』と『しづらい』」『本』第35巻第2号：33－35.

近藤明（2004）「『～ニクシ/ニクイ』の語史への一視点」『金沢大学教育部紀要

人文・社会科学編』第 53 号：99－108.
近藤明（2005）「『～ニクシ』の意味・用法の時代的変化――院政・鎌倉期まで――」『金沢大学語学・文学研究』第 33 号：1－10.
近藤明（2016）「動詞重複形・接頭辞・補助形容詞関係論考　追補」『金沢大学人間社会学域学校教育学類紀要』第 8 号：140－148.
徐修程（1983）「『―にくい』と『―づらい』の異同について」『日本語教育研究論纂　在中華人民共和国日本語研修センター紀要』第 1 集：67－72.
進藤真理（2014）「『～にくい』と『～づらい』の使い分けについて――ウェブコーパスを利用しての調査――」『日本経大論集』第 43 巻第 2 号：365－392.
鈴木基伸（2014）「困難さを表す『にくい』と『づらい』はどのように使い分けられているか――アンケート結果の分析と考察――」『大手前大学論集』第 15 号：95－118.
高島俊男（2007）「『にくい』から『づらい』へ」『文芸春秋』第 85 巻第 1 号：86－88.
飛田良文・浅田秀子（1991）『現代形容詞用法辞典』東京：東京堂出版.
三木望（2004）「『づらい』について――自発と否定，可能の連続性――」影山太郎・岸本秀樹編『日本語の分析と言類型　柴谷方良教授還暦記念論文集』東京：くろしお出版.
森田良行（1977）『基礎日本語』東京：角川書店.
山田俊雄（1999）『ことば散策』東京：岩波書店.

（文学研究科博士前期課程学生）